

追悼文 名誉会員 故高橋道人博士



日本毒性病理学会の名誉会員、高橋道人先生は令和4年7月1日にご逝去（享年84歳）されました。薫陶を受けた弟子の一人として、生前のご指導に深く感謝申し上げるとともに、心より哀悼の真を捧げます。

高橋先生は、昭和39年3月に名古屋市立大学医学部をご卒業後、昭和40年2月より名古屋市立大学医学部助手（第一病理学）として研究生生活を開始されました。その当時のラット胃発がんモデルを用いた成果は、広く国際学会で発表され多くの英文論文で公表されています。昭和45年12月に名古屋市立大学医学部講師（第一病理学）となり、昭和50年4月から米国ネブラスカ州立大学エプリー癌研究所に2年間留学され、主にハムスター腭発がんに関する実験的研究に従事されました。その後、昭和53年4月に国立衛生試験所安全性生物試験研究センターの新設に伴い、病理部一般病理室長に招聘され、平成3年4月に病理部長に昇任されました。平成9年7月に改称した国立医薬品食品衛生研究所の同センター病理部長を引き続き務められ、平成10年3月に定年退官を迎えられました。退官後は、昭和大学薬学部教授として病態生理学教室の修士課程の卒後教育に従事するとともに、病理ピアレビューセンターを開設し、病理診断学分野での申請資料の適正化および信頼性保証に尽力されました。同センターではご逝去される直前も継続して活動されていたと聞いており、今回のご不幸は先生にとって本当に晴天の霹靂であったと想像されます。

国立衛生試験所の病理部室長および部長として、医薬品、食品添加物、農薬を始めとする各種化学物質のがん原性試験および評価に広く関与され、その成果は多くの国際誌に公表されており、詳細を改めて申し上げるまでもないところです。また、中央薬事審議会、食品衛生調査会、生活環境審議会を始めとする各種委員を歴任され、長きにわたり厚生行政に多大な貢献をされました。さらに、経済協力開発機構（OECD）および3極医薬品承認審査ハーモナイゼーション国際会議（ICH；2015年から医薬品規制調和国際会議）において、各種毒性試験法ガイドラインの作成に尽力されました。特に研究面でのご功績は顕著であり、ラット二段階胃発がんモデルを用いて高食塩食や胃酸分泌促進剤が胃がん発生に促進的に働くことを国際誌に公表されました。また、ハムスター二段階腭発がんモデルを用いて、現在も最も死亡率の高い腭がんの発生機序に関する研究を進展させました。小生は平成3年10月より、国立衛生試験所病理部室長として高橋部長の指導のもとでラット胃発がんおよびハムスター腭発がんの研究を進めてきましたが、本当に充実した研究生

活と一緒に過ごせたことに感慨無量です。行政的な立場から関与された発がん性を評価するための系統的な長期動物試験法の詳細は「医薬品の毒性試験指針（厚生省薬務局）」に反映されており、トキシコロジー分野で多くの研究者の座右の銘となっている毒性学のバイブルともいえるキャサレット・ドールの「トキシコロジー」翻訳本の総監修を務められたことは特筆に値します。

高橋先生のお人柄は、直接お話された方ならよくお分かりのことと思いますが、一言で言えば大変ウィットに富んだ研究者であられました。国立衛生試験所病理部時代の職員旅行や忘年会、安全センター幹部職員の親睦会、種々の学会・研究会の懇親会などでの先生の楽しそうなお姿が今でも鮮やかに蘇ってきます。高橋道人先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

2022年7月27日

日本毒性病理学会名誉会員・国立医薬品食品衛生研究所客員研究員
西川秋佳

高橋道人先生との出会いと軌跡

私は名古屋市立大学（名市大）医学部を卒業後、名城病院での1年間のインターンシップ生活を経て、第一病理学教室に入りました。その時の教授は佐藤壽昌先生で、バターイエローによるラット肝発がんで有名な大阪大学、木下良順先生のお弟子さんです。当時、私より3年先輩の高橋先生は助手の身分でありました。そして、助手として入局した私にとって、高橋先生は仕事上、兄貴にあたりました。また、高橋先生と私のつながりは時間のずれがあるものの佐藤病理学教室の学生研究員として繋がっていたことです。この機会に、名市大時代の高橋先生との思い出を記し、高橋先生への哀悼の意を表します。

小生が佐藤病理学教室に入る前後に高橋先生から聞いた話を紹介します。先生は大学を卒業後、豊橋市民病院での1年間のインターンシップを終える頃の1965年1月、名市大の産婦人科に入局の予定で、挨拶の為、佐藤病理学教室を訪問されたとのこと。当時、教室の助手の一人は皮膚科に転向、もう一人の助手は病気がちで、助教授から「君が教室に入らなければ、誰が教室の面倒をみるのだ」ときつく言われ、一夜で考えを変更、急遽、病理学教室入りを決めたとのことでした。

病理に入局後、佐藤先生から、「胃発がんを研究するように。使用する発がん物質は4-NQOがよかろう。また、アルキルベンゼンスルホン酸ソーダ（ABS）のもつ表面活性が発がんに寄与するのでは」との一言のみの指示を受け、研究を始めたとのことでした。実験条件を色々と工夫され学位論文となるラット胃発がん成功され、GANN(現在のCancer Science)に発表されました。即ち、頻度は低いものの、病理学的に異型性の強い胃がんの発生に世界で初めて成功されました。それまで誰も成し遂げられなかったすばらしい成果でありました。後に文部省のがん特別研究班(長与班)：動物胃発がん研究の班員として、活躍するきっかけとなった研究であります。さらに、この成果は後述の高橋先生考案の手製ケージから生まれたことを記します。

高橋先生が胃発がん研究に取り組んでいる頃に入局した小生の思い出は、自らの動物実験を始めるにあたって、高橋先生考案の手製のラット飼育ケージを作製したことでありました。貧乏な貧乏な病理学教室。動物実験を始めるにあたり、既製のラット飼育ケージを購入することが出来ず、高橋先生考案の飼育ケージを作る必要がありました。大学近くの金物屋にケージの底と枠を値切りに値切った金額で作らせ、それに金網とプラスチック板を、針金を用いてペンチで括り付けると言うケージでありました。当時、小生は作業をしながら、こ



1966年、29歳当時の高橋先生

んなことをしていていいのだろうかと浅はかにも自問していたことを思い出します。しかし、上記の高橋先生の光り輝く成果は先生自ら考案の初代ケージから生まれたのです。

高橋先生は学生研究員として教室に出入りする学生さんの卒業にあたり、佐藤病理学教室に残るように熱心に勧誘をされていました。それが功を奏したのかどうかは定かではありませんが、津田、杉浦、花の内、白井、広瀬、立松君らの学生研究員が卒業後、佐藤教室の研究員や大学院生となり、佐藤先生定年退職後に赴任した伊東信行教授の発がん研究を推し進める軍団となるきっかけを作りました。この様に高橋先生は人材の面でも大きな礎石を病理学教室に作られました。

佐藤先生の定年退職後、後任の教授選は諸般の事情で1年間延期。その間、教授無き病理学教室を高橋先生は率いて、学内、学外ともに的確に対応されていたのをはっきりと覚えています。伊東教授が後任教授として着任前に、私は名古屋保健衛生大学(現在の藤田医科大学)に移りました。講師になられていた高橋先生は伊東先生の紹介でアメリカへ留学されました。そして帰国後、しばらくして国立衛生試験所(現、国衛研)初代病理部長の小田嶋先生に乞われ、東京に研究の場を移されました。従って、高橋先生と机を並べての研究生活は6年ちょっとですが、私にとって大変、濃縮した日々でありました。病理解剖を一日3体執刀しながら、また、病理組織診断をしながら、研究面で色々なことを教えていただきました。一方、我が自慢になります、反対に教えることもありました。最近ではお互いに自由の身、高橋先生夫妻と温泉旅行をこよなく楽しみました。正確には楽しみ始め出しました、と言わざるを得ないのが残念です。老齢となった我が身の青春時代の楽しき思い出と共に、感謝の一念です。高橋道人先生、安らかにお眠り下さい。合掌(2022年7月27日、記す。)

一般社団法人化学物質安全性評価研究推進機構(安評研機構)

福島昭治